

教育随想

ふれあい



「私の思い」とひとつこと

橋本千勝

「先生お元気ですか。私も元気です。今日で、卒業してから、ちょうど一か月たちました。家に帰り、カレンダーを見て思い出しました。そしてあのときのことが思い出されてきて、涙が浮かんできて、泣いてしまいました。今日も化学のK先生が、黒板の前に立っていろいろと化学の話をしていると、なぜか先生の姿のように見えてきて、懐かしくなり、今にも、『千勝先生』って呼びたくなりました。K先生が黒板の前に立って、理科の話をするのを聞くのは、いやでたまりません。涙が出てきて、あるとき止まらなくなってきました。今だって思い出しながら……」（後略）S子からももらった手紙のはじめの文です。

あの卒業式の日、あふれ出る涙をこらえもせず、出席番号一番のA君の卒業証書を手にしたまま立っていた私。教師生活十三年、どうしてこのように感動するのだろうか、自分にもよくわからない。ただ言い得ることは「私が子供たちの中にいた」という自負であります。

「自分を形づくっているいくつかの『自己』」この自己形成は二種類あるでしょう。その一つは「自分の体験がそのまま意識されてきた自己」と、もう一つは、他から「おまえはこういう人間だ」と言われて「それを信じ込んでしまっただけの自己」であります。教育への「私の思い」は前者の「自己」をいかに形成させるかであり、後者で形成された「自己」であつても「自分」をよく見つけているうちに自分と一致した意識にたどりつけるようにする。すなわち「あいまいな自己」と「自分」とが「ここがこのように違う」と

とはつきりさせることができるなら、それは自らの力で修正し、作り変えて生きていることができるでしょう。「ここが違う」と意識させるにはいろいろな方法がありましょう。まさに成長している人間は、直接的、間接的経験によって認識され、明瞭化されていくのでしょうか、そう簡単にいかないようです。そこで、多くの先生がたが口にするように、時間的ゆとりがない私も、子供たちに「自分と対話」させ、それを私が読み、一人一人と「触れて」みようとして試みたのです。

各自一冊のノート、一年間の流れから意図的に与えたテーマ。その中に三回ほど保護者のかたにも入っていたきました。残念なことには、まだ、四十五冊のノートが、整理されていないのです。本年度は、保護者のみなさんと数冊のノートを通して、教育について対話してみたいと考えています。

教育における人間像は ①成長の結果、ある人格を持つて生きている面、と②まさに成長しつつある面、の中で②に視点と力点を置かなければならないと思つています。これからの教育は「子供の「良さ」を伸ばす活発さが必要」であり、人間は皆「素質」は同じで、違うところがあるとすれば、それは「活力」（バイタリティー）であると思つてのです。

よいものを作り出すことのできる人間を育てること——が教育愛であり、それに向つて子供らと「触れ合い」たい「私の思い」です。

「中三のあゆみ」

——自分との対話——

ここに書くという事は
自分との対話ではないか。
自分のあいまいさははっきりさせることではないか。
そして、自分との戦いではないか。
人生の壁は
自分の目標に向つて本気になつてぶつかつていく人にもある。
この壁は、暗く重いものでなく、人としての生きがいの壁である。

- ① 私のめあて
- ※親の願い——子供へ、先生へ
- 4月 (2)私の家庭 (3)私の性格
- 5月 (4)修学旅行のひとつ
- 6月 (5)学級の健康診断 (6)私の悩み
- 7月 (7)みんなに訴えたいこと (8)夏休みはこのように過ごす (9)三者面接で考えたこと
- 8月 ※わが子の勉強に思うこと (10)私の健康度合い
- 9月 (11)受験勉強の心構え (12)先生のこと
- 10月 (13)もしできるものなら (14)私の友を語る
- 11月 (15)こんなことを知りたい (16)私の選んだ道
- 12月 (17)私がやる気を出したとき (就職、その喜びと不安) (18)雑感
- 1月 (19)後輩に告ぐ (20)係活動を通して得たこと (21)父母に感謝すること
- 2月 (22)中学時代 (23)その喜び、悲しみ、苦しみ (私の十大ニュース)
- 3月 (24)10年後の私 ※親から先生へ (25)友よさようなら

(郡山市立郡山第五中学校教諭)